



中野仁雄先生を偲んで

日本周産期メンタルヘルス学会名誉理事 岡野禎治

本学会の顧問である中野仁雄先生(九州大学名誉教授)が昨年10月に亡くなりました。日本の産婦人科医領域の第一人者の中でもいち早く周産期メンタルヘルスの分野に着目され、そして偉大な貢献を残された先生でした。

中野先生と初めてお会いしたのは1994年から開始された旧厚生科学研究班(主任研究者 中野仁雄)^{脚注}でありました。その後、このメンバーを基盤にして中野先生が仰っていた「からだ派」と「こころ派」に分かれて、様々な領域からユニークな研究活動が進展して、日本の周産期のメンタルヘルス領域の研究活動に大きな貢献を残されました。

2017年に大分市で開催された日本周産期メンタルヘルス学会学術集会(大会長 佐藤昌司先生)において、久々にお目にかかれたこと嬉しく思っています。

こころから、ご冥福をお祈り申し上げたいと思います。 合掌

脚注 厚生省心身障害研究これからの妊産婦の健康管理システムに関する研究
(https://www.niph.go.jp/wadai/mhlw/ssh_1994_03.htm)



<連載企画> 私たちのまちのメンタルヘルスケア活動 ②

岩手医科大学附属病院における周産期メンタルヘルスの取り組み

福本健太郎、本多笑奈(岩手医科大学神経精神科学講座)、川村花恵(岩手医科大学産婦人科学講座)

岩手医科大学附属病院は総合周産期母子医療センターを併設しており、かつ産科および精神科病棟を有しているため、県内各地から特定妊婦および産後のメンタルケアが必要な母親が紹介となります。

当院で周産期メンタルケアへの取り組みが本格的に始まったのは2019年からと最近です。以前より院内の産科医と精神科医の間で周産期ケアへの重要性が話題にあがることはありましたが、なかなか具体的な形にはなっていませんでした。しかしハイリスク妊産婦連携指導料が診療報酬として算定可能となったことが契機となり、2019年4月より院内で周産期リエゾンカンファレンスが立ち上がりました。現在は月に1回、産科・精神科・小児科医師、産科病棟看護師、精神科外来看護師、社会福祉士ならびに地域の保健師が参加し対象妊婦および褥婦の現状を共有し、治療方針や援助の検討をしています。カンファレンスを立ち上げて以降、産科と精神科の連携が深まり以前よりも産科から精神科に相談を頂く機会が増えてきました。

加えて2019年9月21日に大学病院が新病院に移転した際に受け入れ体制を検討し、精神科外来を受診する周産期メンタルヘルス関連の患者様は全例、この分野を専門とする精神科医師2名が担当する方針としています。当初は特定妊婦の紹介がメインでしたが、徐々に地域の産科医院より産後うつやボンディング障害が疑われる母親の紹介も増えてきており、最近は週に1-2名の新患患者を受け入れています。精神科外来では精神療法はもちろんのこと、母親の幼少期の虐待経験がPTSDや産後うつ病、ボンディング障害のリスクとなるため、当院では初回受診時には全例「子ども時代の逆境的体験(Adverse Childhood Experiences)」の質問をとり、診療の参考としています。今後は当院の児童精神科と連携を取りながら、妊娠、出産から子育てまで切れ目のない支援を提供できる体制を構築していきたいと考えています。

令和3(2021)年度にむけて・理事長ご挨拶

平素より本学会の運営に、ご理解とご尽力を賜わり厚くお礼申し上げます。新型コロナウイルスの感染拡大により、本学会も学術集会の延期や研修会などのさまざまな行事の中止を余儀なくされました。その一方で、学会企画として大規模なコロナ感染関連のアンケート調査を実施し、その結果をプレスリリースし全国紙で発信することができました。ご協力の会員の皆様には深謝申し上げます。令和3年度は、感染の一日も早い終息を願いつつ、本学会に求められる使命を新たなスタイルを創造して果たして参ります。何卒、一層のご支援をお願い申し上げます。(理事長/鈴木利人/順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック教授)

企画・発行：日本周産期メンタルヘルス学会 情報関連委員会

当学会では会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。
ご意見やご要望がありましたら事務局までお知らせください。